

第 241 回松本歯科大学大学院セミナー

日 時: 2011 年 12 月 9 日(金) 18 時 00 分~19 時 00 分

場 所: 実習館 2 階 総合歯科医学研究所セミナールーム

演 者: 遠山 正彌 氏

(大阪大学大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学  
研究科/医学系研究科神経機能形態学講座)

タイトル: 発達障害や心の障害の克服をめざして

発達障害は広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動症などに分類される。広汎性発達障害はさらに自閉症(他人との社会的関係の形成が困難、言葉の発達の遅れ、興味や関心が狭く特定のものにこだわる)、高機能自閉症(自閉症のうち知的発達の遅れを伴わないもの)、アスペルガー症候群(自閉症の特徴のうち言葉発達の遅れを伴わない、知的発達の遅れを伴わない)などに分けられる。

発達障害の特徴にコミュニケーションがとれない、他人の気持ちがわからないなどがあげられる。例えば、物事を中途半端にしておくのが我慢できない、2008 年 4 月 29 日は何曜日だったか覚えている、コンピュータや機械がすごく得意だ、予定が急に変わるのは苦手だ、よく冗談を本気と間違えてしまう、ファッションや流行に全く興味が無い、ストーリーのある本より図鑑や辞典が好きだ、人ごみは嫌いだ、飲み会に行くより図書館に行く方が好きだ、全体より細かいところが気になる、などがその特徴としてあげられる。このうちのどれかは、複数以上は我々も思い当たる。すなわち、発達障害と定型発達との間にははっきりとした境目がない。また高名な物理学者や IT 産業の創始者も発達障害と噂されている。

文部科学省の調査では 6.3%の子どもが、浜松医科大学の調査では 10%を超える子どもが発達障害であると報告された。発達障害の子どもは減るどころか増え続けているのが現状である。なぜか? そのあたりを論議したい。

それでは発達障害の克服には何が必要だろうか。まずは早期発見、早期療育である。2歳までに発見され適正な療育を受ければ、十二分に社会復帰できることが次第に明らかとなってきた。しかし、ここで重大な問題に突き当たる。科学的な診断法がないのである。我々が病気であるとの診断には、各種マーカー、PET、CT はじめ納得できるデータを提示されて、下される。しかし、心の病気には科学的診断法は存在しないのが現状である。

本日は、我々が Eye Tracker と呼んでいる浜松医大で開発中の早期診断のための機器開発や PET による evidence に基づいた科学的診断法の開発について話を進めたい。診断法の確立と並んで重要なのは原因の解明である。しかしながら分子レベルでの解明はいまだなされていない。さらに問題なのは医学、心理、教育の多様な専門知識有する子どもの心を扱う専門家が殆どいないことである。これらの問題を解決するために3大学の連合小児発達学研究科が日本で始めて設置され、来年度からは千葉

*Matsumoto Dental University  
Graduate School of Oral Medicine*

1780 Gobara, Hirooka, Shiojiri,  
Nagano 399-0781, Japan

大学と福井大学を加えて5大学の陣容となる。

本日の講義では発達障害をめぐるこのような問題点ならびに時間が許せば心の障害の原因を分子レベルで解明するアプローチをお話したい。

学歴・職歴

昭和 47 年 3 月 大阪大学医学部卒業

昭和 47 年 4 月 大阪大学副手(附属高次神経研究施設神経解剖学病理学部門)

昭和 47 年 5 月 大阪大学助手(同上)

昭和 52 年 5 月～昭和 53 年 11 月

フランス・クロードベルナール大学(生理学教室)招聘研究員

昭和 55 年 1 月～昭 61 年 3 月

大阪大学助教授(附属高次神経研究施設神経解剖学病理学部門)

昭和 55 年 8 月～9 月

ハンガリー・ゼンメルweis大学(解剖学教室)招聘講師

昭和 61 年 4 月～平成 11 年 3 月

大阪大学医学部・教授(解剖学第二講座)(名称変更により現在は、  
「神経機能形態学講座」)

平成 11 年 4 月 1 日～現在

大阪大学大学院医学系研究科・教授

平成 17 年 4 月 1 日～平成 20 年 3 月

大阪大学大学院医学系研究科長および医学部長(兼任)

平成 18 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月

大阪大学大学院医学系研究科付属子どものこころの分子統御機構  
研究センター・センター長(兼任)

平成 21 年 4 月 1 日～

大阪大学大学院 大阪大学・金沢大学・浜松医科大学 連合小児発達学  
研究科研究科長(専任)大阪大学医学系研究科・教授(兼任)

賞 罰

平成 3 年 第 28 回 ベルツ賞受賞

平成 13 年 第1回 バイオビジネスコンペ JAPAN 最優秀賞受賞 (アルツハイマー病  
の克服)

平成 16 年 第4回 バイオビジネスコンペ JAPAN 優秀賞受賞 (中枢神経軸索再生  
の分子機序)

平成 13 年～現在 Highly Cited Researchers Award in Neuroscience by ISI 受賞  
(ISI 高頻度論文引用研究者賞(神経科学))

所属学会

日本神経化学会、日本神経科学会学会、日本解剖学会、日本自律神経学会、日本  
疼痛学会、国際疼痛学会アジア地区カウンセラー

担当:顎口腔機能制御学 金銅 英二